

教育研究発表会は誰のため何のため 市原豊子

一、はじめに

例年二学期から三学期にかけて各地の幼稚園から教育研究発表会の案内状が届けられる。教育研究会は、それぞれの園が、一年なり半年の間莫大なエネルギーをかけ、園の総力を上げて取り組んで来た研究の成果を示す機会である。しかし現状を見ると、保育者の真摯な努力とは別に、研究会自体がパターン化し、本来の目的からかけはなれて、見せるための、派手なショウへとエスカレートしていく傾向が見受けられる。主催する側の園（子ども、保育者、園長）にとって、また、見学する側の保育者にとつ

て研究発表会は何であろうか、また、日常の保育を高める実質的な研究発表会はどうあればよいのだろうか。いくつかの例に即して考えてみたい。

二、研究指定園

平常から意欲的、継続的、計画的に研鑽を重ね、定期的に成果をまとめて自主的に研究発表会を持つ場合は別として（本来はそうあるべきであるが）、一般には文部省や県から研究指定園に指定されたり、地域内での輪番制などで、他律的に発表園に指定される場合が多い。今日、保育の現場が、まだまだ問題意識にとぼしく、適切な指導者も決して多く

はない状況では、自主的な研究会は期待薄であるのかも知れない。とすれば、他律的に指定されることよっていや応なしに努力することも必要なのである。しかし「当ってしまった」園にとって研究会発表は大荷物である。まして現場にやる気がないところによい込まされた園長の苦労など並たいていではない。けれども当れば当つたなりに努力して研究会を持つはこびとなるが、研究発表会のために努力することが、時として保育自体をゆがめる結果になることもある。

例えば、発表の指定を受けたある園では、体力づくりをテーマに、ボール遊びの研究を行なった。年度当初よりまず、年齢別、月別年間ボール遊びの計画を立て、五月のボール遊び、六月のボール遊び、集団のボール遊び、個人のボール遊び、ボール体操、ボールゲームを行ない、資料を作るために一般体力測定その他、個人のボールの扱いにおける発達測定も行った。用具も、一人一個のカラーボールを整

え、その他にもサッカーボール、ゴムボール、幼児用ラグビーボールなども買い整えた。研究発表の日まで毎日ボール、ボールと過してくる。この間、担任の頭の中は計画通りボール遊びをこなしていくことや、測定データの整理で忙殺される。子どもの興味や欲求などかまってはられないし、他の植物の栽培や小動物の飼育など手のかかるものは今年はおあずけ、運動会も手軽に済ませて、一年間全力を発表会にかけていく。こうなるといささかこっけいであり、また悲壮ですらある。とにかく研究集録もでき上り、立派な研究発表会をし終えることとはホッとして虚脱状態になりしばらく保育に力も入らず、ボールなど見るのもうっとうしく触れたくもない。しかもその後も「ボール遊び」という悪夢のごとき一年間が思い出されてあまりやりたくもない、ということになってしまふ。

ある時期に一つの事に重点を置くことは必しも悪いことではないが、その年度に当つた子どもの経験

が著しくゆがめられることは好ましくない。しかし他にも放送教育の研究指定園になると一年間子どもがテレビづけになったり、視聴覚研究の指定園になったがゆえに、不必要なまでにOHPやテレビやスライドを保育に使用している例もある。このように、かんじんの保育が研究会にふりまわされている例は決して珍しくはない。一見派手で立派な研究会が、実は保育者にも園児にもあまりためにもならず、園の宣伝や園長の体面を保つだけに終ったり、研究会のために買った備品や設備だけがプラスとして残ったという例も少なくないように見受けられる。

三、研究保育

研究保育はショウとして見せることに重点の置かれていることが多い。例えばある園では解体保育で、各教室にレストラン、劇場、ゲームセンター、おみせやさん、ができていて、各所に担当の保育者がいる。どの部屋も、どの製作物もこれ以上はでき

ない、と思うほど立派に仕上がっている。保育者の努力がしのばれるものである。しかし子どもは、でき上ってしまったセットを前にどことなく所在なくウロウロしている。子どもの活動というものは、行為自体が楽しい時にこそ生き生きとしてくるものであることを考えると、でき上った作品より、工夫したり、相談したり、作ったりしている場面こそ公開してはどうだろうか。われわれが参観したいのは特別にしつらえた日や製作物ではなく、もっと普通の日の子どもの姿や、保育者の姿なのだから。

四、研究会の開会行事

事は全て折目正しく始められ終らなければならぬのだろうが、研究発表を前にして、開会行事が長々と続く。主催者挨拶で二、三人の挨拶、続いて来賓挨拶でまた二、三人、その他の来賓の紹介、講師の紹介等まで場合によっては三〇分以上かかったりする。しかしこういった来賓をたくさん招待して行

なうことが、研究会をきばったものにする背景の一つではないだろうか。形式主義は極力さげ、研究会の内容自体に重点をおくことにしたいものである。

五、講師の講評・指導

同じ日に見た、研究保育や研究発表を講師の先生がどうとらえていただろうか、ということは保育した当事者にも参加者にも大へん興味のあるところである。大体は良い点をほめ、労をねぎらい、問題点にはあまり触れずに、別の事例を話したりして終わることが多い。が、講師講評は非常に重要な意味を持ち、その後の保育に影響を与える。若い参加者や、迷いを感じている保育者は「そうか、新しい保育はああするのか」ということになり、自分の園に帰って、見て来たものを実行しようとする。その結果トンチンカンな型だけの解体保育があちこちに展開されることもあるという。こういったことは研究

発表会と無関係ではありえない。

六、まとめ

今日、研究発表会はあまりにもきばったものになりすぎてはいないだろうか。見せる形式の不自然な研究保育ではなく、普通の日の保育を公開し、研究発表ももっと実質本位にすることはできないだろうか、あるいは一園だけの研究発表でなく同一テーマを何園かで研究し、共同発表会や、パネルディスカッションなどにして、討議を深める方向にするのも一案であろう。研究が、発表園の先生にも参加者にも、そして何より子どもたちにとってプラスにならなければならない。そのためには、上から指定されたり、与えられた研究会ではうまくいかないであろう。保育者自身が問題意識を持ち、現場からのもり上りによる自主的な研究会が望まれるのはこのためである。